
伝説の三人を今ここに

神玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説の三人を今ここに

【Nコード】

N1421BA

【作者名】

神玉

【あらすじ】

魂魄 妖忌その人とその周りの人を主観に見ていく物語。

「プロローグ」【かつての記憶】

残ったのは三人だけ。

しかし、その三人の誰もがもはや限界に近かった。

一人は二つの剣を持ち。

一人は二つの銃を持ち。

最後の一人は杖を持っている。

その内二人は多くの人間に囲まれた中

背中合わせに立っている。

そして、同時に言い放つ。

「私の背中はお前に任せた」と・・・。

杖の持ち主は広大な土地を持つ屋敷を守るように立っていた。

両手で術を結び。

屋敷に傷一つつけさせぬようにと。

なぜなら、そこには命を落としても守るべきものがあつたから・・・。

く第一話く【彼が去った理由】（前書き）

まだ夜は明けきっていない。

私は縁側に歩いていき、そこで立ち止まった。

く第一話く【彼が去った理由】

「幽々子様……。」

「それ以上は語らなくてもいいわ、妖忌。私には分かっているから。」

「申し訳ありません。」

「そう堅くならなくていいわ。
でも、ここも少し寂しくなるわね。」

「そうですね……。では、長居するといけないので、私はこれにて失礼します。あと、妖夢のことですが……。」

「心配しなくてもいいわ。私に任せなさい。」

「ありがたく存じます。」

そうして彼はこの場所を去った。

—view 幽々子—

妖夢はどう思うだろうか。

縁側に座り、そう考えながらどれくらいの時間が経っただろうか。

「幽々子様」

彼女が来たようだ。

「妖夢、何かあったの？」

「いえ、特にありませんが……。お祖父様はどちらに？」

彼女が視線を向けてくる。

話すべきではないだろうか。

いや、話すべきなのだろう。

この事を話すことでどうなるかは分からないが、話さなければなるまい。

私は話すことを決めた。

「妖忌は……。ここを去りました。」

少女は驚きの表情をした。

「え……。なぜのですか？」

困惑しているようだった。

当たり前である。

彼——妖忌は妖夢の師であり肉親であり、ここ、白玉楼の専属庭師だった。

その妖忌が突然に白玉楼を去ったのだ。

驚かないはずが無かった。

「彼の本当の思いは私にも知ることはできないわ。でもね・・・」

ここで一呼吸おいた。

自分を落ち着かせるためでもあった。

「彼が去った理由は、少し分かるような気がするの。それには、彼の過去が関係しているわ。」

「お祖父様の過去・・・ですか。」

「ええ。あなたは聞きたいかしら？」

彼についての昔話。」

私には彼女の返事が分かっていた。

なぜなら、私もかつて同じ立場だったのだから。

そして、彼女はかつて私が妖忌にした返事と同じ返事をした。

「お願いします。」と・・・。

私は、妖忌が白玉楼に来て三年が経ったときにこの話を聞かされていた。

「幽々子様には知っていてほしい」と、彼が話してくれたのである。

一気に語るのではなく、毎日少しずつだったが、それが逆に頭に残るようだった。

く第一話く【彼が去った理由】（後書き）

第一話を読んで頂きありがとうございます。

次話からは妖忌の過去について書いていききたいと思っております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1421ba/>

伝説の三人を今ここに

2012年1月3日17時51分発行